

## 日本語・中国語間の翻訳テキストにおける文長の傾向 双方向パラレルコーパスを用いた翻訳行為の特徴の分析

鄧 敏君(トウ ビンクン Teng, Minchun)

名古屋大学大学院・国際開発研究科

### Abstract

Corpus-based translation studies have been applied to testify the features of translational behavior since Toury's (1995) Descriptive Translation Studies and Baker's hypothesis (1993) of translation universals. This paper aims to explore the sentence length in translations by using a small-scale bi-directional parallel corpus between Chinese and Japanese. There is a conventional hypothesis that the translated text tends to be longer than its source text due to explicitation. However, there are opposite evidence to prove that the thinking is not all agreeable. This paper will test the hypothesis by verifying the factors that make sentence length change in translated texts, and discuss what role corpus-based translation studies can play in translation practice.

### 1. はじめに

本稿は、情報伝達の一区切りを示す「文の長さ」の考察を通して、日本語、中国語間の翻訳行為に現れる傾向と特徴を明らかにすることを目的としている。

翻訳という2言語間のコミュニケーション行為の本質を解明するために、翻訳されたテキストはどのようなテキストであるかを記述することは必要不可欠であると思われる。作家であり翻訳家でもある村上春樹は、小説を書くことと翻訳をすることとの違いを以下のように述べている。この2つの作業において、「脳の中はすべて逆の側が使われている感じがする」(村上・柴田 2000:15)。小説を書くこととは、「自我という装置を動かして物語を作っていく作業」(ibid.:16)である。それに対し、翻訳をすることとは、「とにかく自分というものを捨てて訳す」(ibid.:35) 作業であり、「結果的に自己表現になるかもしれないけど、翻訳というのは自己表現じゃない」(ibid.:36) という。このように、翻訳をすることと自発的に文章を書くこととの産出プロセスは相当ことなることがわかる。

一方、翻訳テキストの読み手にとって、翻訳と自然生成のテキストの違いはどのように感じ取られているのか。Tirkkonen-Condit(2002)は、翻訳テキストと非翻訳テキスト(自然に生起する文章)を被験者に判別させ、なぜ翻訳テキストと感じたのかを記述させる調査を行なった。その結果、翻訳テキストと判断される場合は、「ぎこちない、慣用語法に合わない、翻訳調っぽい」<sup>1)</sup>といったネガティブなイメージに結びつくことが多く、翻訳でないかと判断される場合は、「流暢、自然、慣用的な語法にかなった」<sup>2)</sup>といったポジティブなイメージに結びつく答えが多くみられた。しかし、実際の正解率は60%台にとどまり、高いとは言えない。この研究結果は、翻訳テキストが不自然な文体というステレオタイプが一般に存在すること、そして、このステレオタイプに基づいて翻訳テキストかど

うかを識別することが妥当ではないことを物語っている。つまり、受容側の読み手が抱いている翻訳テキストのイメージと実際の状況は、必ずしも一致してはいない。

翻訳テキストとはどのようなテキストであるかを探ろうとする関心は、記述的翻訳研究 (Toury 1995) にもコーパスベースの翻訳研究 (corpus-based translation studies) も共通している。特に、コーパスベースの翻訳研究は、翻訳テキストに現れる特徴を計量的方法によって実証しようとする<sup>3)</sup>。具体的には、翻訳テキストにしばしば現れる特徴として、原文あるいは非翻訳文よりも詳細に説明する傾向を表わす「明示化」(explicitation)、複雑な統語を簡単なものに変えたり、繰り返しを省略したりする「簡素化」(simplification)、目標言語の典型的な使用パターンを多用する「典型的文法へのこだわり・保守化」(normalization or conservatism) といった「翻訳的普遍 translation universals」(Baker 1993) に関心が集まっている。Baker (1993) は「翻訳的普遍」が翻訳テキストに存在しており、起点言語から派生するものではなく、翻訳という一つの独立した体系の中に生じる特徴であり、言語システムに左右されないものであるとしている。これらの問題に関して、すでに数多くの研究が成果を挙げている (Mauranen and Kujamäki 2004; Olohan 2004)。しかし、翻訳の普遍性はあくまでも仮説であり、これらをどこまで援用できるかは疑問視されている。

本稿は、日本語から中国語、中国語から日本語への、ジャンルを限定した小規模双方向平行コーパスを言語資料として、計量的な手法を用いて、翻訳テキストと非翻訳テキスト(自然に生起する文章)における文の長さに関する特徴を考察する。「文」とは、機能的に情報伝達の一区切りを示しており、形式的に 2 つの句点、あるいは句点と同じ機能をなす「?」、「!」、「;」の間に置かれる書記法上の構成単位である。文の長さは、翻訳者が文をどこで区切り、一つの文にどれぐらいの情報量を負わせるかの問題に関係するため、書き手や翻訳者が文章の作成する際に示した意味ある選択であると考えられる。

翻訳テキストにおける文の長さの特徴に関しては、多くの先行研究で「明示化」あるいは「簡潔化」の一つの指標として使われている。前者は、原文テキストの文が翻訳テキストでは長く翻訳される場合を指しており、つまり翻訳テキストに多くの情報が提供され、詳細な説明が加えられる現象である。後者は、短く翻訳される文の現象を指しており、短くなるのは、複雑な情報が示されずに簡単な構造で表現されているからであると言われている。しかし、文の長さや翻訳行為の特徴は単純に結びつくことができないように思われる。たとえば、情報を明示的に示すために翻訳文は原文よりも長くなるという一般化の傾向がある (Vinay and Darbelnet 1995) という議論に対して、Munday (2002: 82) は、翻訳文 (英語) が原文 (スペイン語) より短くなった実例を挙げ、一般化への疑問を投げかけた。翻訳行為にみられる選択の傾向を左右するのは、文の長さがそれぞれの言語においてどのような意味を表しているのか、どのような目的で翻訳が行なわれるのか、どのようなテキストが翻訳されているのかなどの要因も考慮しなければならない。

これらの点を踏まえ、本稿は翻訳文に現れる文の長さや文の区切り方に関する選択にはどのような傾向があるのか、そして観察された傾向は、起点言語や目標言語の影響によるものなのか、それとも翻訳行為自体の性質によるものなのかを明らかにする。具体的には、同一の条件(テキストタイプ、翻訳の目的、テキストの時代など)の資料を選定することによって、コーパス間の比較可能性を高める。また一方の翻訳テキストのみならず、逆の方向の翻訳テキストを同時に検討することによって、言語による影響と、翻訳行為の一般的傾向を分離することができる。本稿におけ

る「翻訳行為あるいは翻訳テキストの特徴や傾向」とは、翻訳文において繰り返してみられる翻訳者の選択の傾向を指している。Baker が言及する「翻訳的普遍」という一般的な特徴だけでなく、起点言語や目標言語に影響されることなども「翻訳行為の特徴や傾向」として扱う。

本稿では、まずパラレルコーパスの構成を述べ、次に日本語の原文、中国語の原文、日本語の翻訳文および中国語の翻訳文の文長の特徴を分析し、そこに観察された傾向の考察を行ない、最後に考察の結果から、日中、中日の翻訳実践への示唆、および残された課題を挙げる。

## 2. コーパスの構築および分析方法

### 2.1 コーパスの構成

本稿では鄧(2006)で構築したパラレルコーパスを用いる。4種類のサブコーパス(subcorpus)は、日本語原文(J-ori)とそれを中国語に翻訳した中国語翻訳文(T-tra)、中国語原文(T-ori)とそれを日本語に翻訳した日本語翻訳文(J-tra)から構成される。中国語原文は、日本語翻訳文のオリジナルテキストである一方、中国語の翻訳文と同じ言語の中国語非翻訳文でもある。逆に、日本語原文は、中国語の翻訳文のオリジナルテキストであると同時に、日本語翻訳文と対照する場合は、日本語非翻訳文となる。

パラレルコーパスの原文テキストは、台湾と日本に関する観光案内の文章である。翻訳文については、日本語から母語の中国語に訳す者3名と、中国語から母語の日本語に訳す者3名のプロの翻訳者からデータを収集した。「台湾や日本の旅行者が読むインターネット上の観光案内文章」という目的に従って翻訳を行なうよう指示を与えることで、同じ翻訳の目的に基づいた質の高い翻訳文を確保した。コーパスのテキスト数、語数、文数の詳細は表1に示す。

表1 パラレルコーパスの構成

サブコーパス 構成内容	J-ori	T-tra	T-ori	J-tra
テキスト数	45	45	39	39
語数 <sup>i</sup>	15,944	12,550	11,915	16,776
文の数 <sup>ii</sup>	619	587	401	608

注 i. 中国語ではCKIPを、日本語では茶筌2000を利用し、形態素解析を行なった結果である。

ii. 文は、2つの句点「。」、あるいは句点と同じ機能をもつ「?」、「!」、「;」の間に置かれる構成単位であると定義する。

### 2.2 分析の手順と手法

文長の特徴を考察するために、まずそれぞれのサブコーパスに対して、文の構成に関する情報を付与した。具体的には、個々の文に対して、テキスト番号、翻訳者、1文の語数(形態素の数)などである。「文」とは形式的に、2つの句点、あるいは句点と同じ機能をなす「?」、「!」、「;」の間に置かれる書記法上の構成単位である。段落の最初の文の場合は、句点「。」などの記号までを一つの文とした。

語数(形態素の数)の計算方法に関して、単語と単語の間にスペースのある英語と違い、日本

語と中国語では語と語の間に区切りはなく、1つの語の境は確実ではない。従って、中国語と日本語の文の長さを分析する場合には、分かち書き、または語彙・形態素分析ツールによって文章を単語に分解しなければならない。本研究では、中国語の2つサブコーパスの場合は、台湾の中央研究院資訊科学研究所(Institute of Information Science Academia Sinica)が1994年に開発したCKIP<sup>4)</sup>を用いた。日本語の解析ツールは、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科松本研究室で開発された「茶筌」Wincha 2000R2<sup>5)</sup>を用いた。機械による解析の精度は100%ではないため、手作業によって分かち書きと形態素の誤りの修正を施した。

語数あるいは文の長さに関して、日本語翻訳文と日本語非翻訳文の間、中国語翻訳文と中国語非翻訳文の間の比較対照はできるが、孤立語である中国語と膠着語である日本語の言語システムは大きく異なり、またCKIPと「茶筌」の語の解析基準も一致していないため、異なる言語間の語数・形態素の比較に関しては問題が生じる。日中両言語間の分割基準の異なる語単位の差異を埋めるために、中国語原文と日本語翻訳文、および日本語原文と中国語翻訳文の相対語数の比率を用いた。具体的に、表1の日本語と中国語の語数の比率関係をサブコーパスのサイズから、日本語の約16000語は中国語の約12000語に相当することから、1.333...という比率を得た。異なる言語間の比較を行なう場合は、中国語の1語は日本語の1.33語に相当するという割合で換算する。

### 3. 分析

以下では、文長の平均、文長の区間別の度数分布、翻訳文における文の合併と分割、翻訳文と原文との相関、翻訳者の個人的な振る舞いなどの観点から分析を行なう。

#### 3.1 文の平均的長さ

表2は、4つのサブコーパス、日本語原文(J-ori)、日本語翻訳文(J-tra)、中国語原文(T-ori)、中国語翻訳文(T-tra)の文総数、文の平均語数( $\bar{X}$ )、および標準偏差(SD)を示す表である。中国語の「換算後」の平均語数( $\bar{X}'$ )および標準偏差(SD')は、中国語の1語は日本語の1.33語に相当するという割合をもとに換算した結果である。

表2 4つのサブコーパスの文の数、文の平均語数、標準偏差

文に関する情報		サブコーパス			
		J-ori	J-tra	T-ori	T-tra
原始数値	N(文の数)	619	608	401	587
	$\bar{X}$ (文の平均語数)	25.76	27.60	29.72	21.37
	SD(標準偏差)	13.47	13.08	18.81	10.18
換算後の数値	$\bar{X}'$ (新文の平均語数)	25.76	27.60	39.53	28.42
	SD'(新標準偏差)	13.47	13.08	25.10	13.53

表2の原始の数値によると、日本語原文(J-ori)と日本語翻訳文(J-tra)の文長の平均と分散の

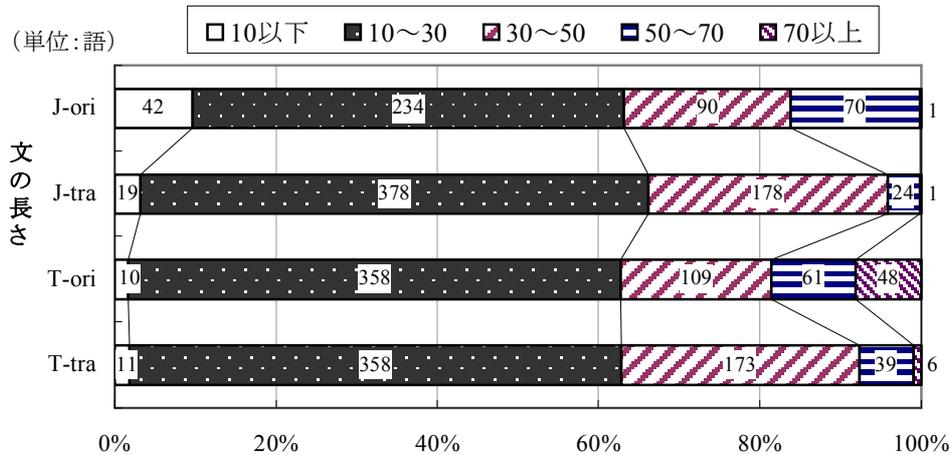


図1 4つのサブコーパスの文長の度数分布

度合いは近似している。一方、中国語原文(T-ori)は中国語翻訳文(T-tra)より平均的に文が長く、長さのばらつきも大きいことがわかる。「換算後」の結果をみると、中国語翻訳文(T-tra)は日本語原文(J-ori)よりも長く、日本語翻訳文(J-tra)は中国語原文(T-ori)よりも短いという傾向がみられた。中国語翻訳文は日本語原文よりも長い、日本語翻訳文は中国語原文よりも短いという結果を得て、2つの翻訳文は異なった傾向を見せた。「換算後」の文の平均長さ $\bar{X}$ は日本語原文(J-ori)が一番短く、中国語原文(T-ori)が一番長く、翻訳文は両者の中間にあることがわかった。

### 3.2 区間分布の度数

図1は、4つのサブコーパスの、文の長さが10語以下、10~30語、30~50語、50~70語、70語以上の区間ごとの文の数を集計した結果を示す。ここでの中国語原文と翻訳文は換算後の数値を用いた。

図1によると、まず、70語以上という特別に長い文の使用は、中国語原文(T-ori)に数多く存在しており、48例あるのに対して、日本語原文(J-ori)では1例、日本語翻訳文(J-tra)では1例、中国語翻訳文(T-tra)では6例しかみられなかった。逆に、10語以下の短い文は日本語原文(J-ori)に比較的多くみられる。10~30語の中程度の文は日本語翻訳文(J-tra)にやや多く、30~50語の文は日本語翻訳文(J-tra)と中国語翻訳文(T-tra)に多くみられる。さらに50~70語の文は、中国語原文(T-ori)と日本語原文(J-ori)が高い割合を占めている。つまり、中国語も日本語も、翻訳文では50語以下という比較的短い文の使用頻度が高く、非翻訳文では50語以上という長い文を多用する傾向がある。また、中国語原文(T-ori)では70語以上の長い文の使用が最も多くみられている。これは、中国語の文構成における独特の特徴であるといえよう。

### 3.3 翻訳文における文の合併と分割

原文の文の数は、翻訳文においてどのような割合で維持されるのかを調査した。中国語原文と日本語翻訳文、および日本語原文と中国語翻訳文を文の単位で対応させると、原文では文の始まりではないが、翻訳文では新たに文が作られる場合もあれば、逆に、原文では1つの文が始ま

るが、翻訳文では前の文と合併する場合もある。翻訳文と原文の文の数を比べた結果を表 3 に示す。

表 3 原文から翻訳文への文の数の変化

	中国語から日本語へ	日本語から中国語へ
原文の文数	(T-ori) 401	(J-ori) 619
新たな文を作成した文の数	+ 238	+ 32
前の文と合併した文の数	- 31	- 64
翻訳文の総文数	(J-tra) 608	(T-tra) 587

表 3 からわかるように、中国語翻訳文(T-tra)は日本語原文(J-ori)よりも文の数が 32 文(619-587=32)、約 5%減少した。一方、日本語翻訳文(J-tra)では中国語原文(T-ori)よりも文の数が 207 文(608-401=207)多く、約 1.5 倍増加した。日本語翻訳文(J-tra)では中国語原文(T-ori)の長い文を中間から切って、文を多く作ったのに対し、中国語翻訳文(T-tra)では日本語原文(J-ori)の文の数をあまり変えずに翻訳したことがわかった。つまり、両言語の翻訳では異なった処理の方略がとられている。中国語翻訳文(T-tra)は日本語原文(J-ori)の文の長さの特徴にしたがって比較的忠実に翻訳しているのに対し、日本語翻訳文(J-tra)は中国語原文(T-ori)の文の長さに左右されずに新たな文の構成が行なわれている。

具体例をみると、中国語原文における特に長い文(1)は、日本語へ翻訳されると、(2)の a~d の 4 つの文になっている。このような例は、中国語から日本語へ翻訳する場合に多くみられる。

- (1) 不過台灣最主流的歷史文化，要算漢人自中國帶來的文化與漢人在台灣自己所創造出的文化，不管是閩南人、外省人、客家人，各族群孕育出屬於自己的特有文化資產，在台灣，至今仍處處可以鑑賞到這些先民所留下的生活軌跡與智慧的結晶，例如台北、台南、鹿港等街頭仍可見古城、寺廟、古街道，就連金門、馬祖、澎湖等外島地區，也可以尋訪到戰爭遺跡、傳統聚落或是文化史蹟。
- (2) a. しかし、台湾で最も主要な歴史文化は、やはり漢民族が中国から伝えた文化と台湾で自ら創り出した文化であると言えるでしょう。  
 b. 閩南人、外省人、客家人は、いずれも各自の特有文化資産を育んできました。  
 c. 台湾ではこれらの先人が残した生活の軌跡と智慧の結晶を至るところで見かけることができます。  
 d. 例えば台北、台南、鹿港の街で見られる古城、寺廟、古街道をはじめ、金門や馬祖、澎湖などの離島では戦争の遺跡、伝統集落、文化の史蹟などが残されています。

### 3.4 翻訳文と原文の文の長さ:テキスト単位の相関

本節では、1 つずつのテキストを単位として、原文と翻訳文の長さの全体的なサブコーパスの相関、および翻訳者別の相関を調べる。テキストごとに原文とその翻訳文の平均語数を調べ、その

間にどのような相関があるかを明らかにすることで、翻訳文にみられる文構成の特徴をより直接的に捉えることができると思われる。採用する統計手法は相関係数<sup>6)</sup>を用いた分析である。

### 3.4.1 日本語原文と中国語翻訳文における文の長さの相関

表4は日本語原文(J-ori)と中国語翻訳文(T-tra)における文の長さの相関<sup>7)</sup>を示した数値である。

表4 日本語原文と中国語翻訳文における文の長さ(テキスト別)の相関

	$\bar{X}$	SD
日本語原文の文の長さ(テキスト別)	26.96	7.12
中国語翻訳文の文の長さ(テキスト別)	21.84	3.68
相関係数 r	0.858	
説明率 (R Sq Linear)	73.6% [(0.858) <sup>2</sup> *100%]	

原文と翻訳文の文の長さの相関係数は0.858であり、相関係数のF検定を行なった結果、有意であった(F(1, 23)= 64.060, p<.01)。プラスの相関係数は右上がりの線に収束する傾向を示しているため、日本語原文(J-ori)と中国語翻訳文(T-tra)における平均の文の長さ(テキスト別)には正の相関がみられる。説明率は73.6%であり、強い相関があることがわかった。つまり、日本語原文(J-ori)の文が長ければ、中国語翻訳文(T-tra)も長く翻訳し、日本語原文(J-ori)が短ければ、中国語翻訳文(T-tra)もその長さを反映して翻訳する傾向がみられる。中国語の翻訳文は日本語原文の文の長さに緊密に関連することから、中国語は文の長さへの制約が柔軟であり、中国語への翻訳行為では、原文が重要な影響要因であるといえる。

次に、翻訳者個人がどのような傾向を示しているかを調べる。図2は中国語訳者3人 Ttr-1、

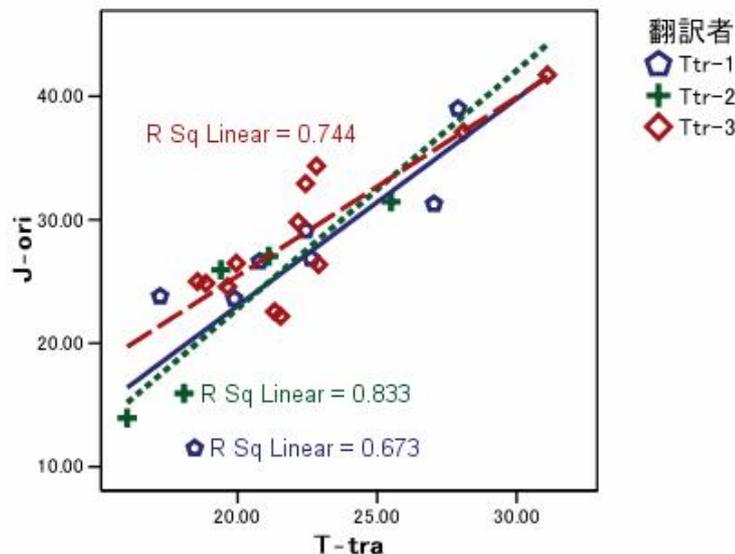


図2 J-ori と T-tra の平均文長の散布図および訳者別の相関

Ttr-2、Ttr-3 の散布点と予測直線が示されている散布図である。

図 2 に翻訳者別の予測直線と説明率(R Sq Linear)が示されている。Ttr-1、Ttr-2、Ttr-3 それぞれの相関係数は 0.820、0.913、0.863 であり、F 検定を行なった結果、翻訳者別の原文と翻訳文における文の長さの相関はすべて有意であった(Ttr-1:  $F(1, 6) = 12.325, p < .05$ , Ttr-2:  $F(1, 3) = 14.976, p < .05$ , Ttr-3:  $F(1, 10) = 29.025, p < .01$ )。また、説明率はそれぞれ 67.3%、83.3%、74.4% であり、それぞれ強い相関があることがわかった。つまり、中国語翻訳者は 3 人とも、翻訳の文の長さ、原文の文の長さを連動させる傾向が一貫して現れているといえる。

### 3.4.2 中国語原文と日本語翻訳文における文の長さの相関

表 5 は中国語原文(T-ori)と日本語翻訳文(J-tra)における文の長さの相関(テキスト別)を示している。表 5 によると、原文と翻訳文の文の長さの相関係数は 0.237 であり、有意ではなかった( $F(1, 23) = 1.375, n.s.$ )。よって、両者の間には相関があるとはいえない。

表 5 中国語原文と日本語翻訳文の文の長さ(テキスト別)の相関

	$\bar{X}$	SD
中国語原文の文の長さ(テキスト別)	30.33	11.59
日本語翻訳文の文の長さ(テキスト別)	30.55	5.39
相関係数 r	0.237	

図 3 の訳者別(Jtr-1、Jtr-2、Jtr-3)の散布点と予測直線が示されている散布図から、全体的な傾向が個人の傾向によるものかどうかを調べる。

図 3 に翻訳者別の予測直線と説明率(R Sq Linear)が示されている。Jtr-1 の原文と翻訳の文の

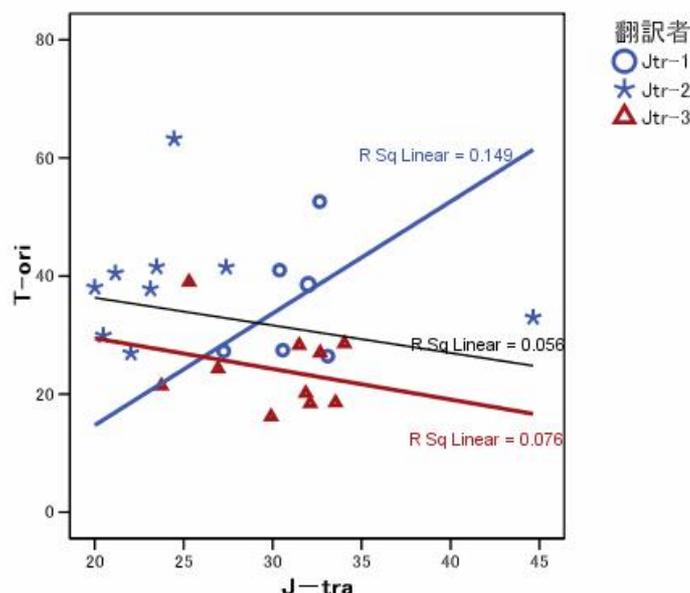


図 3 中国語原文と日本語翻訳文の平均文長の散布図および訳者別の相関

長さの相関係数は 0.386、Jtr-2 は-0.276、Jtr-3 は-0.083 であり、いずれも有意ではなかった (Jtr-1:  $F(1, 4)=0.701$ , n.s., Jtr-2:  $F(1, 7)=0.046$ , n.s., Jtr-3:  $F(1, 8)=0.654$ , n.s.)。つまり、日本語翻訳文の長さ与中国語原文の長さには相関があるとはいえない。また、予測直線の方向が統一されていないことから、訳者によってそれぞれ異なる方略が取られていることがみてとれる。

以上の結果をまとめると、日本語から中国語への翻訳の場合、翻訳文の長さは原文の長さに左右されることがはっきりと現れている。しかし、中国語から日本語に翻訳される場合、日本語の翻訳文は中国語原文の文長に適応しにくく、原文と翻訳文との明らかな相関が観察されない。日本語原文と中国語翻訳文の間の相関が高いこと、および中国語原文と日本語翻訳文の相関が低いことは、日本語と中国語の文構成の特徴を浮き彫りにしているといえる。中国語に翻訳される場合は、原文の文の長さ即して作成されており、中国語は文の長さに対する制約が柔軟であると考えられる。逆に、日本語に翻訳される場合には、原文に合わせる事がほとんどみられず、日本語の文の長さには、一定の独自の基準があるように思われる。

#### 4. 考察

以上で検討してきた文長に関する項目を表 6 にまとめた。

表 6 文長に関する検討項目

検討した項目	観察された現象
文の平均長さ	J-ori < T-tra; J-tra < T-ori
区間別の文長の度数分布	50 語以上の文: T-tra, J-tra < T-ori, J-ori
原文の文の合併と分割	T-tra: 文の増加 > 文の減少 J-tra: 文の増加 < 文の減少
翻訳文と原文の文長の相関	J-ori → T-tra 相関あり T-ori → J-tra 相関なし

文の長さについては大きく 2 点が観察された。第一に、中国語と日本語の翻訳文の共通点として、長い文を使用しないことが挙げられる。文長の区間別分布から、中国語と日本語の原文では 50 語以上の長い文の使用が多くみられるが、翻訳文ではこのような形式を好まず、より中間的な文長を使用する傾向がみられる。これは Baker (1996: 184) が言及する、どちらの言語にも大きく左右されず、中間的な使用頻度を保っているという「leveling out」の特徴といえる。

第二に、中国語と日本語の翻訳文での相違点がいくつか見られる。それは、文長の平均、翻訳文にみられる原文の文の合併と分割、原文と翻訳文の文長の相関で観察された結果からいえる。4 つのサブコーパスの中で、文の数が最も多く、文の長さも比較的短い日本語原文と、文の数が一番少なく、特に長い文が多い中国語原文に対して、中国語翻訳文は日本語原文の特徴を忠実に反映するが、日本語翻訳文は中国語原文の長文を短く切り、日本語原文に似た文を構成している。結果的に、文の数、平均的な文の長さからいうと、翻訳文は 2 つとも、日本語と中国語の原文

の中間にあるが、どちらかといえば日本語原文に近い。

中国語の原文の特徴が日本語の翻訳文にはみられず、日本語の原文の特徴が中国語の翻訳文に表れているという問題に関しては、以下の原因が考えられる。

一つは、日本語翻訳文と中国語翻訳文がともに日本語原文の文長の特徴に近いのは、翻訳者が意識的、あるいは無意識的に文の構成を簡単に処理しようとするメカニズムが働き、結果的に「簡素化」という普遍的な特徴が現れたという可能性がある。「簡素化」とは、翻訳文は原文あるいは非翻訳文よりも簡潔に表現されるということであり、2 言語を仲介する翻訳行為の特徴とされる。訳者にとって短文は長文より作り易く、読者にとっても単純化された情報の方が処理の負担も低く、読みやすい文になるのであろう。そのため、日本語翻訳文と中国語翻訳文はともに日本語の文長の特徴に近いと考えられる。しかし、日本語翻訳文と中国語翻訳文はともに、中国語原文よりは短い、日本語原文の文よりは少し長い。つまり、中国語翻訳文では日本語の原文をより短く表現してはいない。よって、翻訳行為における情報を簡単に処理するメカニズムのみが文の作成に影響する要因とは言えないと思われる。

中国語と日本語の「文」と句点の性質が、翻訳文の作成に与える影響を検討しなければならない。中国語は、1 つの文が長く、節と節の間はコンマを頻繁に使用するため、結果的に句点の使用が少なくなる。先に挙げた例(1)のように、中国語では同じ事柄について述べるのであれば、句点を打たずに節の間に読点で区切り、延々と続く習慣がある<sup>8)</sup>。それに対して、日本語で同じ事柄を説明する場合、「は」の「ピリオド越え」(三上 1960:117-129)の機能があるため、同じ話題のもとでは一旦文を打ち切り、それを新たな文で続けることが一般的である<sup>9)</sup>。3.3 節の分析結果によると、中国語は文の長さに対する制約が柔軟であり、日本語の文の長さには、一定の独自の基準があることがわかった。中国語では句点が頻繁に使用されても決して統語的なエラーではなく、意味の理解の支障にもならないため、中国語における句点の使用の制約は比較的強くない。日本語原文のような文の長さを中国語に訳すことは許容範囲内であるため、特に変更することなく訳されている。しかし、日本語へ翻訳する場合は、文の長さや句点の使用には一定の制限があり、延々と句点を打たずにいるとすわりの悪い文になってしまう。よって、句点の使用において、制限の緩い中国語と制限の厳しい日本語の間では、中国語が日本語に翻訳された文は短くなり、日本語が中国語に翻訳された文は原文に従う傾向を示した。これは一種の翻訳行為の傾向として考えることができる。すなわち、ある言語表現の制限が一方の言語において、もう一つの言語より緩い場合、緩い方の言語に翻訳した場合は制約の厳しい言語の特徴に引き寄せられ、制約の厳しい言語の表現に近づくのである。結果として、規制の緩い言語の原文に現れる特徴が、他の 3 つのテキストとは著しく異なったものとなる。

本稿でみられた、両言語における制約の強弱がある場合、翻訳文の使用状況は制約の強い方の言語に近いという傾向は Teich (2003) においても言及されている。Teich (2003) は、ある文法体系における選択肢の数が翻訳行為の傾向に影響すると指摘している。すなわち、目標言語においてある文法体系の選択肢が起点言語よりも多い場合、起点言語の影響が大きいとみられるが、目標言語において選択肢が少なければ、目標言語の規範を守る傾向が強いということである。文法体系の選択肢の数とは、本稿でいう「ある言語表現に対する、起点言語と目標言語における制約」を意味している。選択肢が多いということは、本研究では中国語の文長に対する制約が弱いと

いうことであり、逆に選択肢が少ないということは、日本語の文長への制約が厳しいことを意味する。言い換えれば、起点言語におけるある表現の制約が目標言語の制約よりも緩い場合、つまり、目標言語において選択が少ないときは、目標言語の規範が守られる。一方、起点言語におけるある表現の制約が目標言語の制約よりも厳しい場合、つまり、目標言語において選択肢が多いときには、起点言語の影響が強くみられる。中日両言語間の翻訳に見られる文長の特徴はこの現象をよく表わしているといえる。

## 5. おわりに

本稿の調査を通して、日中間の翻訳における文の長さは、起点言語および目標言語の性質から大きな影響を受けており、簡単に「明示化」や「簡潔化」によって説明することはできないことが実証された。具体的な発見として、目標言語の制約が比較的緩いほど、翻訳テキストでは起点言語の特徴に従いやすく、目標言語が厳しい制約をもつ言語であるほど、目標言語のもつ特徴が翻訳テキストで強く反映されるという傾向がある。これは起点言語と目標言語の相対的關係から見られる、翻訳行為における意思決定の一種の傾向であると言える。

本稿を含めて、コーパスベースの翻訳研究は、不自然さや目標言語から逸脱したいいわゆる翻訳調の表現を見つけだすことを目的とはしていない。プロの翻訳者による翻訳テキストでは、不自然さや目標言語から逸脱した表現は滅多に見られないが、あるとしても使用頻度は傾向を示すほどのものにはならない。翻訳行為にみられる傾向や特徴は、翻訳テキストの質に影響するものではないが、翻訳の実践の方略として参考になることがある。たとえば、3.2 節で分析した結果の中で、翻訳テキストは非翻訳テキストと原文テキストよりも中間的な表現を選びがちであるという傾向が見られた。このような中間的な選択傾向によって、翻訳テキストが不自然なテキストになってしまうことはない。この結果を受けて、実際に翻訳を携わるとき、長い文を作成することを意図的に避ける必要はない根拠になると思われる。中国語あるいは日本語へ翻訳する場合、日本語と中国語の文の長さに関する性質を念頭に置けば、わざわざ文を過度に短く区切る必要はなく、カンマを駆使しながら、必要があれば長文で表現することも許されないことではない。本稿は翻訳行為にみられる選択の傾向を明らかにすることを目的としたが、ここで観察された傾向は日中、中日の翻訳実践への応用にもつながるといえる。

本稿では、特定の研究対象に対する計量的な研究方法によって、翻訳行為の傾向を裏付ける根拠を得ることができた。コーパスベースの翻訳研究の方法論によって、原文との比較のみならず、同じ言語の非翻訳文との比較も可能になり、翻訳テキストおよび翻訳行為を検討する視点が豊かになったといえる。今後この類の研究は、量的な分析だけではなく、質的な分析も加え、さらに分析の枠組み、テキストタイプなどを拡大して、多方面の検証をする必要があると思われる。

---

著者紹介：鄧 敏君(トウ ビンクン/ Teng, Minchun) 名古屋大学大学院・国際開発研究科・国際コミュニケーション専攻 後期課程に在学中。現在は主にコーパスを用いて翻訳テキストの特徴に関する研究 (corpus-based translation studies) に携わっている。

連絡先： [claireteng@hotmail.co.jp](mailto:claireteng@hotmail.co.jp)

---

【註】

- 1) Tirkkonen-Condit (2002:212-3) では、次のように述べている。“The comments that accompanied the texts that were thought to be translations, ... reflect an assumption that translations tend to be clumsy, unidiomatic, and that they tend to sound like translations.”
- 2) Tirkkonen-Condit (ibid.:211-2) では、次のように述べている。“The subjects’ comments on the texts that they assumed to represent original writing reflect an assumption that original writing is fluent, natural, and idiomatic and expert-like and that it has good readability and natural sounding dialogue.”
- 3) コーパスベースの翻訳研究は、翻訳者個人のスタイル、翻訳者訓練、翻訳実践への応用などの研究にも応用されている。詳しくは Olohan (2004) を参照されたい。
- 4) CKIP の中国語は「中文自動断詞系統」である。詳しくは <http://ckipsvr.iis.sinica.edu.tw/> を参照されたい。
- 5) 詳しくは <http://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/> を参照されたい。
- 6) 有意差の分析が条件間の差異をみるのに対して、相関・予測の分析は条件間の関連をみる。よって、各条件のデータ同士は対応のあるデータでなければならない。散布図とは、対応する 2 変数の数字を縦軸・横軸の座標とみなして、データを平面上の点として図示したものである。そして、データ同士の相関関係を一次方程式として表現することができる。相関係数とは、2 変数の相関の強さと方法を表す統計量である。記号は “r” である。r の値は、0 をはさんで、-1~+1 の範囲で変化する。実際に r の値は多かれ少なかれ偶然によって生じる可能性を含んでいるため、相関の有意性検定によって偶然に出現した値に過ぎないのか否かを判定しなければならない。これには F 分布を利用する。相関の有意性の検定が確認すると、次に説明率の判定に進む。説明率は、予測式的中率と等しい。本研究では、“R sq Linear” として表示する。つまり、相関係数 “r” の 2 乗である。説明率の意味は、目的変数のデータの分散が、予測変数との間の相関関係によって R sq Linear の数値に縮小したということである。さらに詳しい言及は田中・山際 (1992) を参照されたい。
- 7) ここでは原始の数値を用いた。日本語と中国語の語数を直接的には比較できないが、同じ軸のデータは同じ言語のため、相関係数の結果への影響はない。
- 8) Tsao (1990: 63) は“A sentence in Chinese can be roughly defined as a topic chain, which is a stretch of discourse composed of one or more comment clauses sharing a common topic.”と述べており、また、Tsao (ibid.:ix) はアンケート調査を通して中国語における文の句点は個人差による揺れがあり、中国語では文の定義がはっきりとしないことを説明している。
- 9) 遠藤・武吉 (1990: 59) でも、中国語は句読節が短くて多い、日本語は句読節が長くて少ないという表現上の大きな違いを日中翻訳における重要なポイントとしている。遠藤・武吉の言う句読節とは一

般に言われる文の中の「節」であり、本研究における文の長さとは句点の付け方を指している。小さい単位の節をみるか、あるいは大きい単位の文をみるかという見方が違うだけで、本稿の見方は結果的に遠藤・武吉(1990)の見方と矛盾しない。

## 参考文献

- Baker, M. (1993). *Corpus Linguistics and Translation Studies: Implications and Applications*. In M. Baker (Ed.), *Text and Technology: In honor of John Sinclair*. Philadelphia and Amsterdam: John Benjamins. 231-250.
- Baker, M. (1996). *Corpus-based Translation Studies: The Challenges that lie ahead*. In H. Somers (Ed.), *Terminology, LSP and Translation: Studies in Language Engineering*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. 175-186.
- Mauranen, A. and Kujamäki, P. (Eds.). (2004). *Translation Universals: Do they exist?* Amsterdam: John Benjamins.
- Munday, J. (2002). *Systems in Translation: A Systemic Model for Descriptive Translation Studies*. In T. Hermans (Eds.), *Crosscultural Transgressions: Research Models in Translation Studies II: Historical and Ideological Issues*. Manchester: St. Jerome.76-92.
- Olohan, M. (2004). *Introducing Corpora in Translation Studies*. London and New York: Routledge.
- Teich, Elke. (2003). *Cross-Linguistic Variation in System and Text -- A Methodology for the Investigation of Translations and Comparable Texts*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Tirkkonen-Condit, S. (2002). *Translationese – A Myth or an Empirical Fact? A study into the linguistic identifiability of translated language*. *Target*, 14(2): 207-220.
- Toury, Gideon (1995). *Descriptive Translation Studies and beyond*. Philadelphia and Amsterdam: John Benjamin.
- Tsao, F.F. (1990). *Sentence and Clause Structure in Chinese: A Functional Perspective*. Taipei: Student Book Co., Ltd.
- Vinay, J. P. and Darbelnet, J. (1958). 2nd edition (1977). *Stylistique comparée du français et de l'anglais: Methode de tradition*. translated by J. C. Sager and Hamel, M. J. (1995). *Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 石村貞夫(1995)『SPSSによる統計処理の手順[第3版]』東京図書
- 大原信一監修、遠藤紹徳・武吉次郎編著(1990)『新編・東方中国語講座 第4巻【翻訳編】』東方書店
- 田中敏・山際勇一郎(1989)『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版
- 鄧敏君(2006)「中日翻訳における文の「出発点」の選択に関する研究」『通訳研究』Vol.6, 15-35.
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版
- 村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』文芸春秋

